

一紅会・歴史研究同好会第12回 渡辺房男先生と行く

「富山歴史散策1泊2日バスツアー」参加者名簿（敬称略・順不同）

催行目 平成24年(2012)5月20日(日)、21日(月) 雨天催行

目的地 富山市、高岡市、氷見市、砺波市、南砺市

宿泊地 (財)富山勤労総合福祉センター・呉羽ハイツ

〒930-0142 富山市吉作4103-1

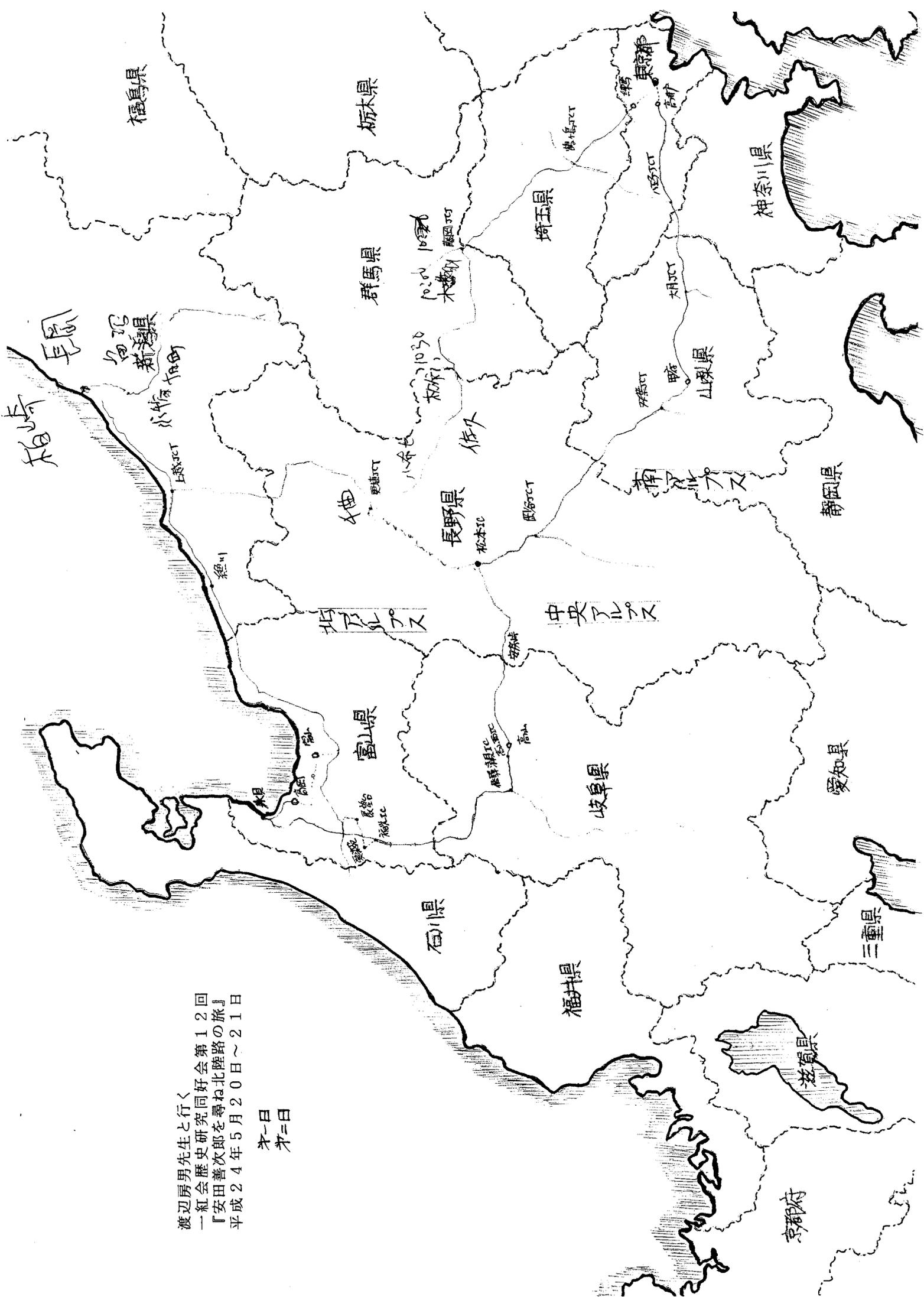
(電話)076-436-0191(代) (FAX)076-436-0190

NO.	卒業年次	氏名	備考	NO.	卒業年次	氏名	備考
1	S38年卒	渡辺 房男	講師	23	S38年卒	長沼 真	
2	S30年卒	神田 四郎		24	"	柘津 信夫	
3	"	神宮司房義		25	"	前田 栄一	
4	"	鮎川ますみ		26	"	山田 常夫	欠席
5	"	呉藤勢津子		27	"	梅澤 梅子	
6	"	塩瀬 昭子		28	"	鈴木 紀子	
7	"	轟 佐知子		29	S40年卒	斉藤 勝人	
8	"	八木原順子		30	"	藤巻 芳彦	
9	S32年卒	若尾 和子		31	"	宇野由美子	
10	"	雨宮 武		32	S41年卒	山本 秀彦	
11	S33年卒	河内 一郎		33	欠席	中込 勝子	飯田知人
12	"	五味 一彦		34		神田 信子	神田夫人
13	"	早川 圭蔵		35		瀧川 さち代	神田知人
14	"	樋川 紘一		36		斎藤智恵子	神田知人
15	"	飯田富美子	一紅会会長	37		新井 道子	神田知人
16	"	斉藤由美子	甲府から	38		石井 泉女 <small>(もとめ)</small>	神田知人
17	S35年卒	作道 恒		39		佐野 知子	神田知人
18	S36年卒	田村 久夫		40		小坂 敏子	神田知人
19	"	雪江 武雄		41		荒木 高子	神宮司知人
20	"	谷口百合子		42		清水 容子	井上知人
21	S38年卒	一瀬 明		43		折口有里子	井上知人
22	"	市橋金之助		44	S30年卒	井上 若子	世話人
				45	S38年卒	薬袋 俊次	20日午後のみ

全44名(男性:19名、女性:25名)

◎45名(男性:20名、女性:25名 (20日午後のみ薬袋氏現地参加))

◎京王大型観光バス使用 運転士(加藤、中山)2人・・中山さんは前回もドライバー



渡辺房男先生と行く  
 一紅会歴史研究会第12回  
 『安田善次郎を尋ね北陸路の旅』  
 平成24年5月20日～21日

オ一日  
 オ二日

平成23年11月6日(日)

## 一紅会歴史研究会

### 「儲けすぎた男」～安田善次郎の幕末維新～

渡辺 房男(日本文藝家協会会員)

#### ○ 芙蓉懇談会という組織

みずほ銀行、沖電気、損保ジャパン、明治安田生命、丸紅、大成建設、サッポロビルなど70社以上が加入。

これらは、戦前の安田財閥、浅野財閥、大倉財閥らの諸企業が、財閥解体後に改めて集まった諸企業。

みずほ銀行の前身は富士銀行、日本興業銀行、第一勧業銀行

主力となる富士銀行の戦前は、安田銀行。

安田銀行は富山出身の両替商、安田善次郎(1838-1921)が一代で築き上げた日本最大の支店網を持つ銀行である。

#### ○ 両替商と善次郎

複雑な江戸期の貨幣制度。

(江戸時代の金貨、銀貨、銅貨という三貨制)

(江戸の金使いと大阪の銀使い)

1両と小銭である1文との価値の異常なまでの格差。

(金1両=4分=16朱=銭4000文)

(1両=銀60匁)

(小判を使うことなく一生を過ごした江戸の庶民たち・・・)

必然的に両替商が生まれ、庶民の暮らしを支える。

2種類の両替商があった。

大名や大身の旗本の御用を務める「三井家」「小野家」「島田家」などの本両替商と200軒以上の小銭を扱う銭両替商。

善次郎は、銭両替商として出発しながら、本両替を目指す。

#### ○ 白刃の下の善次郎

幕末の動乱期、江戸に横行する強盗と辻斬り。

三井などの本両替商は閉店休業状態。

数回にわたって強盗に襲われながらも、店を開いた善次郎。

幕府御用の金貨回収の御用拝命。

第1の蓄財と出世の糸口を得る。

○ 太政官札と善次郎

慶応4年（1868）新政府は産業基盤の整備という名目で多額の不換紙幣である太政官札を発行。

当初の目的を逸脱して、大部分が戊辰戦争の軍事費として使われた。

恐るべき太政官札の値崩れ・・・。

善次郎は誰もが安値で手放した太政官札を買い占める。

政府の威圧的な布告により値を取り戻した太政官札。

その間、善次郎は多額の札を底値で買占め、次のステップへの経営基盤を構築

○ 公債証書と善次郎

新政府の旧武士階級への様々救済策として、政府は秩禄公債（明治9年）を発行。

公債証書の発行により年金化を図った。

満期償還で元金を受け取れるが、生活の困窮の中で証書売って現金化を求める下級士族たち。

善次郎の試みは、

証書の買い上げにより資産を増やすことであった。

○ 国立銀行と善次郎

明治5年（1872）の国立銀行条例が布告された。

アメリカの銀行制度を模範にして近代的な金融機関として国立銀行（国の法律によって生まれた銀行・・私立銀行）の創業開始。

しかし、第1から第5（第3は未開業）なでの4行しか開業しなかった。

金兌換制の銀行券を発行したため、多くの人々が金と引き換えててしまう事態となった

慎重な善次郎は、金兌換の危険性を予測し、開業せず

明治9年の設立要件緩和の条例改正を契機に

善次郎は第3国立銀行の設立を図った。

その年12月に、第3国立銀行が開業し、善次郎は頭取となる。

以後、全国に国立銀行が創設され、総数153行となる。

- 安田銀行（後の富士銀行）と銀行王善次郎の誕生  
明治9年（1878）開業の第3国立銀行には、他の出資者が存在した。  
善次郎が目指したのは、自分自身による銀行の設立であった。  
三井銀行（明治9年7月開業）に引き続き、  
善次郎は明治13年（1880）1月1日、安田銀行を開業。  
銀行王安田善次郎の誕生。  
以後、太平洋戦争が終わる昭和20年（1945）まで安田銀行は、安田財閥の基幹金融機関として発展。  
大正12年の預金高5億円強、支店網200余）  
戦後、財閥解体により、安田銀行は閉業、富士銀行として再発足。  
現在のみずほ銀行。
  
- 夢に賭ける善次郎  
生命保険事業の着手（明治安田生命の前身である共済500名社を明治13年に創立）。  
損害保険事業の着手（損保ジャパンの前身である安田海上火災の創業）。  
浅野総一郎とともに京浜工業地帯の開発を計画  
（鶴見駅から海沿いに走る鶴見臨海線に今も残る安善駅と浅野駅）。  
東京から関西への弾丸列車構想。  
（計画では、東京大阪間を6時間で結ぶ。鉄道省の反対で挫折）
  
- 後年の善次郎の社会貢献  
慈恵会病院への寄付（3万円）  
地元の富山職工学校や商業学校生徒への奨学金と校舎建設資金の寄付など（6万円）  
日比谷公会堂を含めての東京都市改造計画に寄与。  
東大安田講堂の寄付（死の年、100万円）など。  
（100万円は当時の米価で換算すると、約4億円）  
大正10年（1921）9月28日朝、神奈川県大磯での不運な死  
（享年84歳）

(以上)

平成24年5月20日

### 「安田善次郎と山梨中央銀行」

明治9年12月、安田善次郎は、第三国立銀行を開業した。

その折、近代的な銀行金融の簿記について不慣れであったため、山梨中央銀行の前身である山梨の金融会社「興益社」の創業者である栗原信近に指導を仰いだ。その後、安田善次郎は、興益社が第十国立銀行と発展した時、県外株主となって、経営に協力した。

#### 〈余 録〉 安田善次郎からの手紙

興益社が国立銀行への転換を決議し、創業手続に忙殺されて多忙な日々を送っているところへ一通の手紙が届いた。差出人は安田善次郎と川崎八右衛門であった。文面には「弊行創立開行之儀 不馴ニ而 百事不行届心痛罷在候ニ付 尊君之御教諭ニ預り度 奉懇願候」とあり、国立銀行創業にあたって、栗原信近に助言と指導を求めたものであった。折しも、安田善次郎らは第三国立銀行の創設準備を進めていたが、法律知識、簿記学等の知識がきわめて乏しい当時において、国立銀行条例および成規を正しく理解し、国立銀行を設立することは容易ではなかったのであろう。栗原は、このときすでに、中央に相当の人脈を有し、また、非常な努力家でもあったので、国立銀行創業の事務に精通し、安田ら中央財界人にも、その名を知られていた。安田善次郎は、のちに当時を懐想して「第三銀行の創設は文運進歩の今日より見れば極めて容易の業なれども、当時においてには困難、障碍甚だ尠なからざりしが、余は之に堪へ、之を排し、漸くにして同志を糾合し、之が開業をなすに至れり。」と述べている。



安田善次郎

こうした指導と助言が縁となって、安田善次郎と川崎八右衛門の両名は、当行創業当初から唯一の県外株主として名を連ねた。

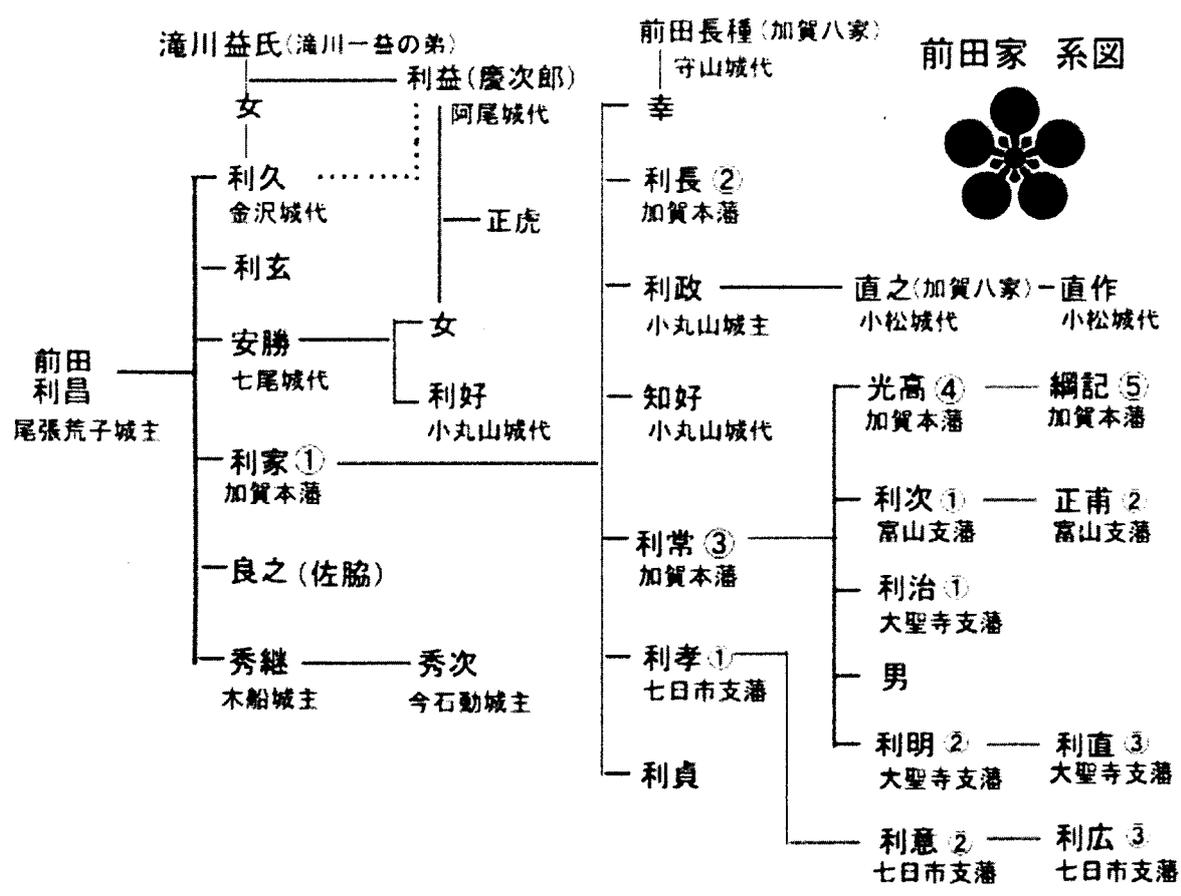
注：(1) 『安田保善社とその関係事業史』P.44

(「山梨中央銀行 創業百年史」より)

### 加賀前田家

- 加賀前田家  
加賀本藩系図  
加賀藩の城代
- 加賀藩の石高  
七日市支藩系図  
前田慶次郎
- 加賀八家  
富山支藩系図  
高山右近
- 大名の家格  
大聖寺支藩系図  
年号表

### 加賀前田家



前田利昌	父親	尾張荒子城主
前田利久	長男	後の金沢城代
前田利玄	次男	能登で没したという記録が残る。
前田安勝	三男	後の七尾城代
前田利家	四男	後の金沢城主
前田(佐脇)良之	五男	家康の家臣になり、三方ヶ原の戦いで討死する。
前田秀継	六男	後の木舟城主

まえたとしいえ 前田利家 天文七年(一五三八)(同六年説も)―慶長四年閏三月三日(一五九九・四・二七)

加賀金沢城主。のち豊臣五大老の一人、秀頼の傅役。尾張荒子(名古屋市中川区)城主前田利春(利昌とも)の四男、母は竹野氏娘。幼名犬千代。通称孫四郎、又左衛門。羽柴筑前守加賀中將、のち從二位権大納言。天正十八年(一五九〇)秀吉の関東攻めには北陸道軍の総大將。同年四月二十日に上野松井田城(群馬県松井田町)を開城させたのをはじめ、厩橋、箕輪、武蔵鉢形、松山、八王寺城などを攻略。同五月の上野総社、武蔵国内では越生報恩寺宛など七通の禁制発給が知られる。六月一日に龍穗寺(埼玉県入間郡)門前、寺領百姓らの支配権を安堵。同十二日に児玉の久米氏に当村地下人・百姓らの還住を保護。この間、秀吉は利家の攻略をてぬるいとして譴責。同二十三日早朝、八王寺城を陥落させ、城代横地氏のほか城兵千人を討ち取る。七月五日北野(同所沢市)神主栗原氏に「武州神主司」を安堵。大道寺政繁(上野松井田城主)の助命に努めたが赦されなかった。南部利直の元服に烏帽子親となり「利」の一字を授けたとされる。戦後、北条氏邦(鉢形城主)を食客として遇した。慶長四年閏三月三日大坂で死去。六十二歳。贈從一位。法名は高徳院殿桃雲浄見大居士。墓は金沢市野田山の前田家墓地。位牌所は桃雲寺(金沢市野田)、宝円寺(同市宝町)など。

まえたとしなが 前田利長 永禄五年正月十二日(一五六二・二・一五)―慶長十九年五月二十日(一六一四・六・二七)

越中守山(富山県高岡市)城主。のち加賀金沢、越中富山、高岡城主。前田利家の嫡男、母は松(芳春院)。幼名犬千代、通称孫四郎。羽柴肥前守、越中侍從、のち從三位中納言。初諱は利勝。室は織田信長四女永(玉泉院)。天正十八年(一五九〇)関東攻めに父利家とともに従軍。六月二十四日木村一との連署証状は二本木(埼玉県入間市)百姓中に兩人の判形無き時は同村の夫役・伝馬の供出を厳禁。七月六日秀吉から上杉景勝・木村一・山崎堅家とともに忍城への急派を命じられる。なお、関ヶ原合戦時には、母芳春院(松)を人質として江戸に遣し、東軍に属し、戦後は加賀・越中能登で百二十万石の大大名となる。慶長十九年五月二十日越中高岡で死去。五十三歳。贈正二位権大納言。法名は瑞龍院聖山英賢大居士。墓地は高岡市大野(県史跡)、金沢市野田山。位牌所は瑞龍寺(高岡市関本町)。

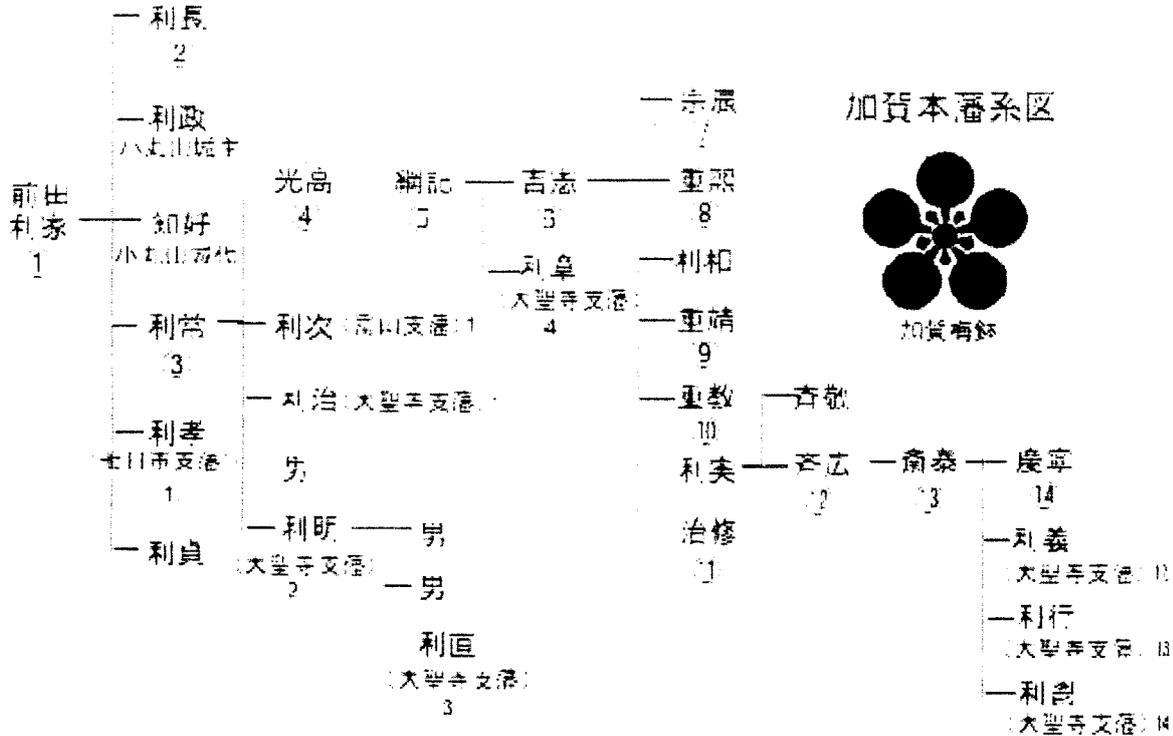
### 加賀本藩系図

加賀前田家  
加賀本藩系図  
加賀藩の城代

七日市支藩系図

加賀八家  
富山支藩系図

大聖寺支藩系図



### 前田家系図

■慶長5年(1600)

加賀本藩(122万石)の藩祖は前田利長がなり、14代前田慶寧まで続く。

■慶長20年(1615)

七日市支藩(1万石)の藩祖は前田利孝(利家の5男)がなり、12代前田利昭まで続く。

■寛永16年(1640)

富山支藩(10万石)の藩祖は前田利次(加賀本藩3代藩主利常の次男)がなり、13代前田利同まで続く。

■寛永16年(1640)

大聖寺支藩(7万石)の藩祖は前田利治(加賀本藩3代藩主利常の3男)がなり、14代前田利啓まで続く。

\*このサイトでは加賀本藩(122万石)の藩祖は前田利長で、開祖は前田利家としています。

## 加賀本藩年表

★天文6年(1537)

利家は利昌(前田家系圖)の四男として尾張荒子城に生まれる。

★弘治4年(1558)

利家は22歳で10才年上のまつ(芳春院)を妻にする。

★永禄4年(1561)

織田信長は朝倉孝景( )・浅井長政( )連合軍と戦い勝利する。

★永禄5年(1562)

利家とまつ(芳春院)の間に嫡男利長が生まれる。

★永禄9年(1566)

木下藤吉郎は墨俣一夜砦(岐阜県大垣市墨俣町)を築く。

★永禄10年(1567)

織田信長は稲葉山城を( )と改名する。

★永禄12年(1569)

利家は32才で尾張荒子城主になる。

★元亀元年(1570)

利家は尾張荒子城から近江長浜に移る。

★天正元年(1573)

木下藤吉郎→羽柴秀吉は(織田信長家臣)は( )に入城する。

★天正2年(1574)

羽柴秀吉は( )を築城して( )を廃城にする。

★天正3年(1575)

利家は越前府中城を築城する。利家初めて城持ち大名になる。  
尾張荒子城は廃城になる。

★天正4年(1576)

織田信長は( )を築城する。

★天正8年(1580)

羽柴秀吉は( )から( )に入城する。

★天正9年(1581)

利家は能登羽咋地区領主になり、越前府中城から( )に入城する。  
利長は越前府中城代になる。

★天正9年(1581)

利長19歳で、織田信長( )の娘永姫(玉泉院)を妻にする。

★天正9年(1581)

利家は( )に入って半年後に能登1国領主になり、( )に入城する。  
天正10年(1582)～天正17年(1589)にかけて( )を築城して入城する。

☆天正10年(1582)6月2日

本能寺の変で織田信長( )は割腹自害49才

☆天正10年(1582)6月13日

山崎の合戦で明智光秀( )は死亡55才

☆天正11年(1583)6月

賤ヶ谷の戦いで、柴田勝家(柴田勝家)は自害する。61才  
柴田勝家方の北加賀領主佐久間盛政(佐久間盛政)は敗戦後 山城槇島で斬罪になる。  
羽柴秀吉(姫路城)の時代になる。

★天正11年(1583)

利家は北加賀領主・能登1国領主になり、七尾城 から 七尾城 に入城する。  
利長は 七尾城 から 七尾城 に入城する。

★天正11年(1583)

羽柴秀吉(姫路城)は 七尾城 を築城して入城する。

★天正11年(1583)

溝口秀勝(丹羽長重→信長→秀吉家臣)は 七尾城 に入城する。

★天正13年(1585)7月11日

羽柴秀吉は右大臣(従二位)関白になる。49才

利家は権大納言(従二位)になる。49才

\*右大臣は律令制度の官僚3位の職。(右大臣)

★天正13年(1585)

羽柴秀吉(大坂城)の越中出陣で、佐々成政(魚津城)は降伏する

利長は越中西部領主(高岡地区)になり、七尾城 から 七尾城 に入城する。

丹羽長重(信長→秀吉家臣)は 七尾城 に入城する。

★天正13年(1585)

佐々成政は減封され新川郡(魚津城)に移る

利長は越中1国領主になり、七尾城 から 七尾城 に入城する。

★天正15年(1587)

羽柴秀吉(大坂城)は太政大臣(従一位)太閤になり、豊臣秀吉となる。51才

\*太政大臣は律令制度の官僚最高位にある職。(太政大臣)

★天正15年(1587)

豊臣秀吉(大坂城)の九州平定後に佐々成政(魚津城)は肥後熊本に移る。

☆天正16年(1588)

佐々成政は一揆の責任を問われ所領没収、摂津尼崎で切腹

★文禄元年(1592)3月12日

豊臣秀吉朝鮮出兵

★文禄2年(1593)

利政は能登1国領主になり、七尾城 に入城する。

★文禄3年(1594)

豊臣秀吉は大坂城から 伊弉利城 に入城する。

★慶長元年(1596)9月2日

豊臣秀吉2度目の朝鮮出兵

★慶長2年(1597)

利政は 七尾城 から 小丸山城 を居城にする。

溝口秀勝(丹羽長重→秀吉家臣・大聖寺城主)は越後新発田へ移る。

山口宗永(小早川秀秋の家臣)が大聖寺城主になる

★慶長3年(1598)4月20日

利家が隠居し、家督を利長に譲る。  
利長は北加賀を相続して北加賀・越中1国を領する。  
利長は権中納言(従三位)になる。

★慶長3年  
丹羽長重(信長→秀吉家臣)は 富山城 から 金沢城 に入城する。

☆慶長3年(1598)8月  
豊臣秀吉が伏見城で死去62才

☆慶長4年(1599)3月  
利家大阪城で死去63(62)才

★慶長4年(1599)4月  
利長は 富山城 から 金沢城 に入城する。

★慶長4年(1599)4月  
徳川家康が豊臣政権の実権を取る。

★慶長5年(1600)9月  
関ヶ原の合戦に前田利政(利家の弟)は東軍に参加せず能登1国を没収される。

南加賀の小松領主(小松城)丹羽長重(丹羽長重→信長→秀吉家臣)と大聖寺領主(大聖寺城)山口宗永(小早川秀秋の家臣)は関ヶ原の合戦で、西軍に参加して、南加賀を没収される。

★慶長5年(1600)10月  
利長は38才で、北加賀・越中1国と新たに南加賀・能登1国を領し、加賀・能登・越中3国を領する。

★慶長8年(1603)  
徳川家康、征夷大將軍(従二位)に任ぜられ江戸幕府を開く  
江戸幕府は幕藩体制を敷き、領国支配の大名を藩と呼ぶようになる。

★慶長8年(1603)  
利長は加賀・能登・越中3国を領する122万石加賀藩の藩祖になる。利家は開祖か？

★慶長10年(1605)6月  
利長(利家嫡男)は利常(利家4男)に藩主を譲り隠居する。隠居城として富山城に入城する。

★慶長14年(1609)  
利長は富山城火災のために魚津城に避難する。隠居城として関野ヶ原(後に高岡となる)に高岡城を築城する。  
利長は金沢城より、3国(加賀・能登・越中)支配には高岡城を重要視する。

★慶長19年(1614)5月20日  
利長は高岡城で、6年間過ごして53歳で死去 権大納言(従二位)になる。

### 前田利長(加賀藩の藩祖)年表

- ★天正3年(1575)越前府中城に入城する。
- ★天正9年(1581)19歳で、織田信長(安土城)の娘永姫(玉泉院)を妻にする。
- ★天正11年(1583)松任城に入城する。
- ★天正13年(1585)守山城(越中西部領主)に入城する。
- ★天正13年(1585)富山城(越中1国領主)に入城する。
- ★慶長3年(1598)2代領主(北加賀領主・越中1国領主)になる。
- ★慶長4年(1599)金沢城に入城する。
- ★慶長5年(1600)関ヶ原の合戦で、西軍に参加して、南加賀を没収される。

## 加賀八家

★村井家(松根城代)1万6千5百石(豊後守)  
加賀八家村井家の祖は村井長次(村井長頼の嫡男)になる。村井長頼は慶長5年(1600)人質となつた芳春院(利家の妻・松)と供に江戸行き、慶長9年(1604)江戸に前田家の人質として送られた利家5男前田利孝(七日市支藩)の教育係りを務めるが、慶長10年(1605)10月江戸で没する。村井長次(村井長頼の嫡男)は利家の7女千代を妻にする。

★奥村宗家(末森城代・金沢城代)1万3千石(従五位伊予守)  
奥村助右衛門永富は前田利春→利久→利家に仕え荒子城代になっている。  
末森の合戦で末森城を死守し、加賀八家奥村宗家の祖になる。  
利家が死去すると隠居して出家する。元和10年(1624)6月12日83才で没す。永福寺に葬られる。

奥村(従五位下河内守)栄明(奥村永富の嫡男)は加賀八家奥村宗家の2代目になる。  
山崎(長門守)庄兵衛長徳(利家家臣)の娘亀子を妻にしている。  
元和6年(1620年)5月21日53才で没す。

★奥村支家(加賀本藩留守居役・金沢城代)1万2千石(備後守)  
加賀八家奥村支家の祖は奥村易英(奥村永富の次男)になる。  
奥村易英は前田利久(金沢城代)の後を継いで金沢城代になる。  
慶長21年(1616)に家老になり、加賀前田家4代(利家・利長・利常・光高に使える)。  
寛永20年(1643)12月21日没す。

★前田家(直之系)(小松城代)1万1千石(土佐の守)  
前田利政(利家次男)の嫡男直之は加賀八家前田氏(直之系)の祖になる。  
【他サイトリンク→[前田土佐守家資料館](#)】

### 前田利長(加賀藩の藩祖)年表

- ★天正3年(1575)越前府中城に入城する。
- ★天正9年(1581)19歳で、織田信長(安土城)の娘永姫(玉泉院)を妻にする。
- ★天正11年(1583)松任城に入城する。
- ★天正13年(1585)守山城(越中西部領主)に入城する。
- ★天正13年(1585)富山城(越中1国領主)に入城する。
- ★慶長3年(1598)2代領主(北加賀領主・越中1国領主)になる。
- ★慶長4年(1599)金沢城に入城する。
- ★慶長5年(1600)加賀・能登・越中3国を領する。
- ★慶長8年(1603)加賀・能登・越中3国を領する122万石加賀藩の藩祖になる。
- ★慶長10年(1605)利常(利家4男)に藩主(加賀本藩)を譲り 富山城に入城する。
- ★慶長14年(1609)富山城火災のために魚津城に避難する。
- ★慶長14年(1609)高岡城に入城する。
- ★慶長19年(1614)53歳 高岡城で死去する。

★天正13年(1585)羽柴秀吉(高岡)の越中出陣で、佐々成政(高岡)は降伏する。  
利長は越中西部領主(高岡地区)になり、高岡から富山城に入城する。  
丹羽長重(信長→秀吉家臣)は、高岡に入城する。

## 前田家

加賀国金沢藩（金沢市）の藩主家の前田呼称については、太宰府に配流されて死んだ菅原道真の末裔が太宰府近辺の前田（現在地不明）を領したことによるという説と（『寛永諸家系図伝』）、道真の末裔原田仲章の子仲房が、尾張国愛知郡前田郷（名古屋市中川区富田町前田）を領したという説がある

### A 加賀国金沢藩（前田宗主家）

天文年間(1532~54)菅原姓前田利隆の子利昌が、愛知郡荒子城（中川区荒子）を築いて知行二千貫文。その子利家が織田信長に仕えて、天正三年(1575)に越前国府中（福井県武生市）三万三千石。同九年に能登一国に移封。同十一年に豊臣秀吉に仕えて加賀半国を加増されて加賀国金沢藩八十万石。その子利長が関ヶ原合戦に東軍に加担して北陸で戦い、戦後に加賀・能登・越中三国を領有。寛永十一年(1634)に百十九万二千七百六十石。同十六年に光高が弟利次に越中国富山藩（富山市）十万石と三弟利治に加賀国大聖寺藩（加賀市）七万石を分知し、寛文四年(1664)に百二万五千二十石。明治に利嗣が侯爵。

### B 上野国七日市藩

利家の五男利孝は、慶長九年(1604)江戸に行き幕府に人質となっていた義母芳春院（まつの方）に随従。幕府から千人扶持。金沢藩から二千人扶持。元和二年(1616)に大阪ノ陣での功により上野国七日市藩（豊岡市七日市）一万十四石。明治に利昭が子爵。

### C 越中国富山藩

寛永十六年(1639)に利常の次男利次が、兄光高より越中国富山藩（富山市）十万石を分知された。明治に利同が伯爵。

### D 加賀国大聖寺藩

寛永十六年(1639)に利常の三男利治が、兄光高より加賀国大聖寺藩（加賀市大聖寺町）七万石を分知され、元禄五年(1692)に利直が弟利昌に一万石を分知したが、宝永六年(1709)に利昌が刃傷事件を起こして切腹したとき、その一万石は返付された。文政四年(1821)新田一万石が増加し、本宗金沢藩から二万石相当の年貢米一万石を分与されて計十万石。明治に利暲が子爵。





加賀藩の城代

加賀前田家	加賀藩の石高	加賀八家	大名の家格
加賀本藩系図	七日市支藩系図	富山支藩系図	大聖寺支藩系図
加賀藩の城代	前田慶次郎	高山右近	年号表

\* 加賀藩は能登・加賀・越中の中心になる主な城には城代を置き、地域本城の出城・支城には城番を置いた。

七尾城・舟岡城・松倉城・弓庄城・阿尾城などの山城や砦はこの頃から廃城になる。

\* 元和元年(1615)一藩一城の前には地域の出城・支城はほとんど廃城になる。

\* 年代によって城代・城番は代わっていますので、参考程度にして下さい。

能登の城代

城名	城代	入城年号	備考	姻戚
田鶴ヶ浜館	長(甲斐守)連龍	..	(加賀八家)	..
七尾城	前田安勝	天正9年(1581)	利昌3男	利家の兄
小丸山城	前田利政(城主)	文禄2年(1593)	利家家臣	利家次男
小丸山城	高畠(石見守)定吉	文禄2年(1593)	利政家臣	芳春院の甥
小丸山城	前田利好	慶長2年(1597)	利家家臣	安勝嫡男
小丸山城	前田知好	慶長15年(1610)	利家家臣	利家三男
福水城	鈴木因幡(城番)	天正6年(1578)	長連龍家臣	..
末吉城	平氏(城主)	..	利家家臣	..
末吉城	高山右近	天正16年(1588)	利家客将	..
末森城	奥村(伊予守)永富	天正12年(1584)	(加賀八家)	..

\* 穴水城→福水城→田鶴ヶ浜館の長連龍は<sup>信長の家来</sup>別格で城主扱い。

\* 末吉城は平氏から高山右近にしてありますが、詳しい資料がなく管理人の個人的解釈です。

加賀の城代

城名	城代	入城年号	備考	姻戚
金沢城	前田利久	天正11年(1583)	利昌嫡男	利家の兄
舟岡城	高畠(石見守)定吉	天正11年(1583)	利家家臣	芳春院の甥
津幡城	前田秀継(城主)	天正11年(1583)	利昌6男	利家の弟
切山城	不破彦三	天正12年(1584)	利家家臣	..
松根城	村井(豊後守)長頼	天正12年(1584)	(加賀八家)	..
松任城	赤座吉家	慶長5年(1600)	利家家臣	..
小松城	前田(土佐守)直之	慶長5年(1600)	(加賀八家)	..
和田山城	岡島(備中守)一吉	慶長5年(1600)	利長家臣	..
大聖寺城	津田(遠江守)重久	慶長5年(1600)	利長家臣	..

越中の城代

城名	城代	入城年号	備考	姻戚
弓庄城	天正11年(1583)廃城	..	..	..
木舟城	前田秀継(城主)	天正12年(1584)	利昌6男	利家の弟
今石動城	前田秀次(城主)	天正13年(1585)	利長家臣	前田秀継嫡男
今石動城	篠島織部清了	文禄2年(1593)	利長家臣	..
阿尾城	菊地武勝(城主)	天正12年(1584)	利家家臣	..
阿尾城	前田慶次郎	天正13年(1585)	利家家臣	利久長女(?)
増山城	中川(武蔵守)光重	天正13年(1585)	利家家臣	利家次女(斎)
富山城	横山(山城守)長知	天正13年(1585)	(加賀八家)	..
安田城	岡島(備中守)一吉	天正13年(1585)	利長家臣	..
城生城	青山(佐渡守)吉次	天正13年(1585)	利家家臣	..
城生城	篠島織部清了	慶長5年(1600)	利長家臣	..
守山城	前田(対馬守)長種	天正13年(1585)	(加賀八家)	利家長女(幸)
守山城	岡島(備中守)一吉	..	利長家臣	..
魚津城	青山(佐渡守)吉次	天正15年(1587)	利家家臣	..
松倉城	??(城番)	天正15年(1587)	青山の家臣	..

### 主な城の城主・城代年表

#### ★天正8年(1580)

羽柴秀吉は長浜城から姫路城に移る。

#### ★天正9年(1581)

前田(筑前守)利家は能登1国領主になり、菅原館から七尾城に入る。  
七尾城代には前田安勝(利家の兄)(前田家系図)がなる。

#### ★天正10年(1582)～天正17年(1589)にかけて小丸山城を築城する。

#### ☆天正10年(1582)6月2日

本能寺の変で織田信長(安土城)は割腹自害49才

#### ☆天正10年(1582)6月13日

山崎の合戦で明智光秀(坂本城)死亡55才

#### ☆天正11年(1583)

賤ヶ谷の戦いで、柴田勝家(北の庄城)自害する。  
柴田勝家方の北加賀領主佐久間盛政(金沢城)は敗戦後山城槇島で斬罪になる。  
羽柴秀吉(姫路城)の時代になる。

#### ★天正11年(1583)

利家は北加賀領主・能登1国領主になり、金沢城に入る。  
金沢城代には前田利久(利家の兄)(前田家系図)がなる。  
松根城代には村井(豊後守)長頼(加賀八家)がなる  
松任城主には前田(肥前守)利長(前田利家嫡男)がなる。  
舟岡城代には高島(石見守)定吉(芳春院の甥)がなる。

#### ★天正11年(1583)

羽柴秀吉は姫路城から大阪城に入る。

★天正12年(1584)

切山城代に不破彦三(利家家臣)がなる。

末森城の合戦で、末森城代に奥村(伊予守)永富(加賀八家)がなる。

★天正13年(1585)

阿尾城代に前田慶次郎がなる。

阿尾合戦で、神保氏張(守山城)に勝利する。

★天正13年(1585)

前田利長は越中西部領主になり、守山城に入る。

守山城代には前田(対馬守)長種(加賀八家)がなる。

増山城代には中川(武蔵守)光重(利家次女(齋)の婿)がなる。

★天正13年(1585)

佐々成政(富山城)は減封され新川郡(魚津城)に移る。

前田利長は越中1国領主になる。

富山城代には横山(山城守)長知(加賀八家)がなる。

城生城代には青山(佐渡守)吉次がなる。

★天正15年(1587)

佐々成政は新川郡(魚津城)から肥後熊本に移る

魚津城代には城生城代の青山(佐渡守)吉次がなる。

城生城代には篠島織部がなる。

★文禄2年(1593)

前田利政は(利家次男加賀本藩系図)能登1国領主になり、七尾城に入る。

七尾城代には舟岡城代の高島(石見守)定吉(利家夫人芳春院の甥)がなる。

★慶長2年(1597)

前田利政は七尾城から小丸山城を居城にする。

小丸山城代には前田利好(安勝嫡男)(前田家系図)がなる。

七尾城は廃城になる。

★慶長2年(1597)10月

前田利長は従三位参議に任ぜられ、越中1国を領する。守山城から富山城に入る。

★文禄3年(1594)

豊臣秀吉は大阪城から伏見城に入る。

★慶長3年(1598)4月20日

利家が隠居し、家督を利長に譲る。

利長は北加賀を相続して北加賀・越中1国を領する。

利長は従三位権中納言になる。

☆慶長3年(1598)8月

豊臣秀吉が伏見城で死去62才

☆慶長4年(1599)3月

利家大阪城で死去62才

★慶長4年(1599)4月

前田利長は富山城から金沢城に入る。

★慶長5年(1600)9月

関ヶ原の合戦で、前田利政(利家次男加賀本藩系図)は東軍に参加せず能登1国を没収される。

南加賀の小松領主丹羽長重(小松城)・大聖寺領主溝口秀勝(大聖寺城)は関ヶ原の合戦

で、西軍に参加して、南加賀を没収される。

★慶長5年(1600)10月

前田利長は38才で、北加賀・越中1国と新たに南加賀・能登1国を領し、加賀・能登・越中3国を領する。

小松城代には前田(土佐守)直之(加賀八家)がなる。

大聖寺城代には津田(遠江守)重久がなる。

松任城代には赤座吉家がなる。

★慶長8年(1603)

徳川(江戸)幕府は幕藩体制を敷き、領国支配の大名を藩と呼ぶようになる。

前田利長は加賀・能登・越中3国を領する加賀藩122万石(加賀藩の石高)の藩祖となる。

### 加賀八家

加賀前田家	加賀藩の石高	加賀八家	大名の家格
加賀本藩系図	七日市支藩系図	富山支藩系図	大聖寺支藩系図
加賀藩の城代	前田慶次郎	高山右近	年号表

■加賀藩には加賀八家と呼ばれる八人の大名家老(年寄役・人持組頭)がいた。

★本多家(筆頭家老)	5万石	★村井家(松根城代)	1万6千5百石
★長家(穴水城主→福水城主)	3万3千石	★奥村宗家(末森城代)	1万3千石
★横山家(富山城代)(国家老)	3万石	★奥村支家(留守居役・金沢城代)	1万2千石
★前田家(長種系)(守山城代)	1万8千石	★前田家(直之系)(小松城代)	1万1千石

■貞享3年(1686)5代藩主綱紀(加賀本藩系図)の時に、藩の職制改革の時に定められ、1万石以上の家老(年寄役・人持組頭)で、八家が加賀八家と呼ばれ、世襲制に定められた。  
「それぞれの石高は時代によって多少の変動がある。」

★本多家(加賀本藩筆頭家老)5万石(出羽守)

加賀藩筆頭家老の本多家(加賀八家)の祖、本多政重は徳川家康の重臣本多正信の二男で、上杉家の家老直江兼続(与板城)の娘婿になる。

本多家の禄高は大名にも匹敵する五万石で、屋敷の敷地は1万坪あり、現在本多の森(上屋敷の庭)となっている。

【他サイトリンク→藩老本多蔵品館】

★長家(穴水城主)3万3千石(大隅守・甲斐守)

長連龍(長氏21代目当主長氏系図)は織田信長家臣で、天正6年(1578)菱脇の戦い(能登の合戦)で勝利し、後に利家の与力となり、加賀八家長家の祖となる。

加賀八家長家2代目長好連は利家の8女福と婚約するが死去する。

★横山家(富山城代)(加賀本藩国家老)3万石(山城守)

加賀八家横山家の祖は横山長知(富山城代)(横山長隆の次男)になる。

横山長隆は利家の越前府中時代に利家に仕えたが、賤ヶ岳の合戦で戦死。

横山長知嫡男の横山康玄は高山右近(高槻城・末吉城)の娘を妻にしていたが、慶長19年(1614)右近が国外追放の時に離縁している。

★前田家(長種系)(守山城代)1万8千石(対馬守)

加賀八家前田氏(長種系)の祖は前田長種になる。

前田長種は尾張前田城主で織田信長の家臣になり、前田利家の本家筋になるが、小牧長久手の戦いで…仔細省略…前田城を開城し、後に前田利家の家臣になり、前田利家の長女幸を妻にする。

3代藩主利常(利家の4男)の幼少期には守山城で後見(教育係り)を務める。

## 万葉集（萬葉集）

いまだに明らかになっていないことが多い その成立し上や編纂目的などについても古来さまざまな論議が繰り返されてきた

### 【概要】

（万葉集）は七世紀後半から八世紀後半に作られた「やまと歌」約四五四〇首を集めた歌集 全二十巻 「やまと歌」の他に四首の漢詩や一編の漢文などを収める 「やまと歌」は全て漢字で書かれている 作者は、名前の記されている者が約四五〇人 作者不詳歌が全体のほぼ半数の約二二四〇首に及び、総文字は（漢字）数は約十六万五千字と数えられている

### 【書名】

#### 1) 読み方

今の世の多くの人はいこれをマンヨーシューと読むが、つい最近まではマンニョーシューと唱える者がかなりあった 「因縁」「観音」などと同じ連声と呼ばれる中世の読み癖によるもので、「三位」「陰陽師」「雪隠」などmやtの韻尾の場合、主としてn韻尾を持つ字が上に、ア・ヤ・ワ行で始まる文字が下に来る場合にきて熟合する場合に起こる日本語特有の現象

#### 2) 万葉の意味

- ①「よろづの言の葉」多くの歌の意 歌を植物の葉にたとえた
- ②万葉という漢語には「万代」「万世」（長い年月、永遠）という意味もあり永遠に伝わる歌集という祝福も込めた

### 【成立】

（万葉集）の成立に関する記録は（万葉集）自体にも『日本書紀』などの同時代の歴史資料にも見られない 各巻の「やまと歌」の制作年代の範囲や、巻毎または一巻の中での編集方法の変化などから成立時期を推定している（万葉集）二十巻は一度に成立したのではない

- ①まず七世紀末に巻一の前半（原撰部げんせんぶと言う）が編まれ
- ②続いて巻一の後半が増補されるとともに巻二が編まれ
- ③さらに八世紀半ばに、二巻の続編として巻三～巻十六が編まれたと考えられる
- ④巻十七以降はおおとも大伴家持のやかもち周辺の歌を日付順に記録したもので編集の上で巻十六までとは大きな断絶があり、八世紀末に加えられたものと思われる なお、（万葉集）には大量の注記を含む これは③の段階から九世紀にかけて書き加えられた可能性がある

## 【歌の種類】

(万葉集)の主な巻では、「やまと歌」を内容により三種類に分類する(「部立」)

「雑歌」<sup>ぞうか</sup> 宮廷の晴の場で詠まれた歌と、宴の場で発達した詠物歌や旅の歌など

「相聞」<sup>そうもん</sup> 男女の恋の贈答歌を中心とする歌(相聞は本来、相手の様子を尋ねる、  
便りし合うという意味の漢語)

「挽歌」<sup>ばんか</sup> 人の死に関わる歌(挽歌は本来、<sup>ひつぎ</sup> 柩を挽く時の歌謡をいう中国の用語)

## 【時期区分】

《第一期(初期万葉)》<sup>じよめい</sup> [舒明天皇の時代(629~641年)~壬申の乱(672年)]

唐が中国を、新羅が朝鮮半島を統一する東アジアの激動期 日本でも国家体制の整備が始まる 宮廷の儀礼・行幸・宴の中で簡素で力強い「やまと歌」が誕生 作者は主に天皇・皇族

《第二期》 [壬申の乱~平城遷都(710年)]

壬申の乱を経て、天武天皇・持統天皇の強力な指導により律令国家の建設が進む 新時代にふさわしい力漲る「やまと歌」が作られる 作者は主に天皇・皇族・宮廷歌人

《第三期》 [平城遷都~<sup>やまのうえのおくら</sup> 山上憶良の没年(733年)]

唐の玄宗の新政により国際交流が活発化し、東アジアは安定と交流の時代に入る 日本では遣唐使の情報をもとに律令体制の徹底化が進む 中国文化の影響下に新しい「やまと歌」が花開く 作者は主に宮廷歌人・官僚

《第四期(末期万葉)》 [憶良の没年~最終歌(759年)]

唐では<sup>あんろくざん</sup> 安祿山・<sup>ししめい</sup> 史思明が挙兵 日本では東大寺大仏造立が進められる中で藤原氏と皇族・伝統氏族の対立が激化する 「やまと歌」は社交性を強める一方、不安な心の表現となる 作者は主に大伴家持とその周辺の人々

## 【登場人物】

天皇・皇族・貴族・官人

①額田王<sup>ぬかたのおお</sup>

②柿本人麻呂

③山上憶良

④大伴家持

⑤作者不詳(詠みびとしらず)

東歌・防人歌など

## 大伴家持

有力氏族大伴氏の中の安麻呂に始まる佐保大納言家の跡取りとして生を享けた

父は旅人で母は側室 生年は養老二年（718）とする説が有力

家持は十代から叔母の坂上郎女さかのうえのいらの手ほどきを受けて「やまと歌」を作る

坂上郎女は兄旅人が任地の大宰府で正妻の大伴郎女を失った後、旅人や幼い家持らの世話をするために筑紫に下る 天平二年（730）旅人は念願叶い大納言に任官し帰京するも、その半年後死去

天平十年（738）頃内舎人うどねり、同十七年従五位下 十八年越中守として赴任、天平勝宝三年（751）小納言せうなごんとなって帰京 同六年兵部少輔となり、兵部大輔、右中弁を歴任 天平宝字二年（758）因幡守となる

その後信部（中務）大輔、薩摩守、大宰少貳、中務大輔、左京大夫、衛門督、参議、左大弁兼東宮大夫などを歴任 名門であったが藤原氏の台頭により政治的には不遇、藤原仲麻呂にうとまれ一時左遷されたが間もなく復歸し、陸奥按察使鎮守府將軍むつあぜちを兼ね、奥州に追いやられ延暦四年（785）中納言従三位で薨じた 六十八歳

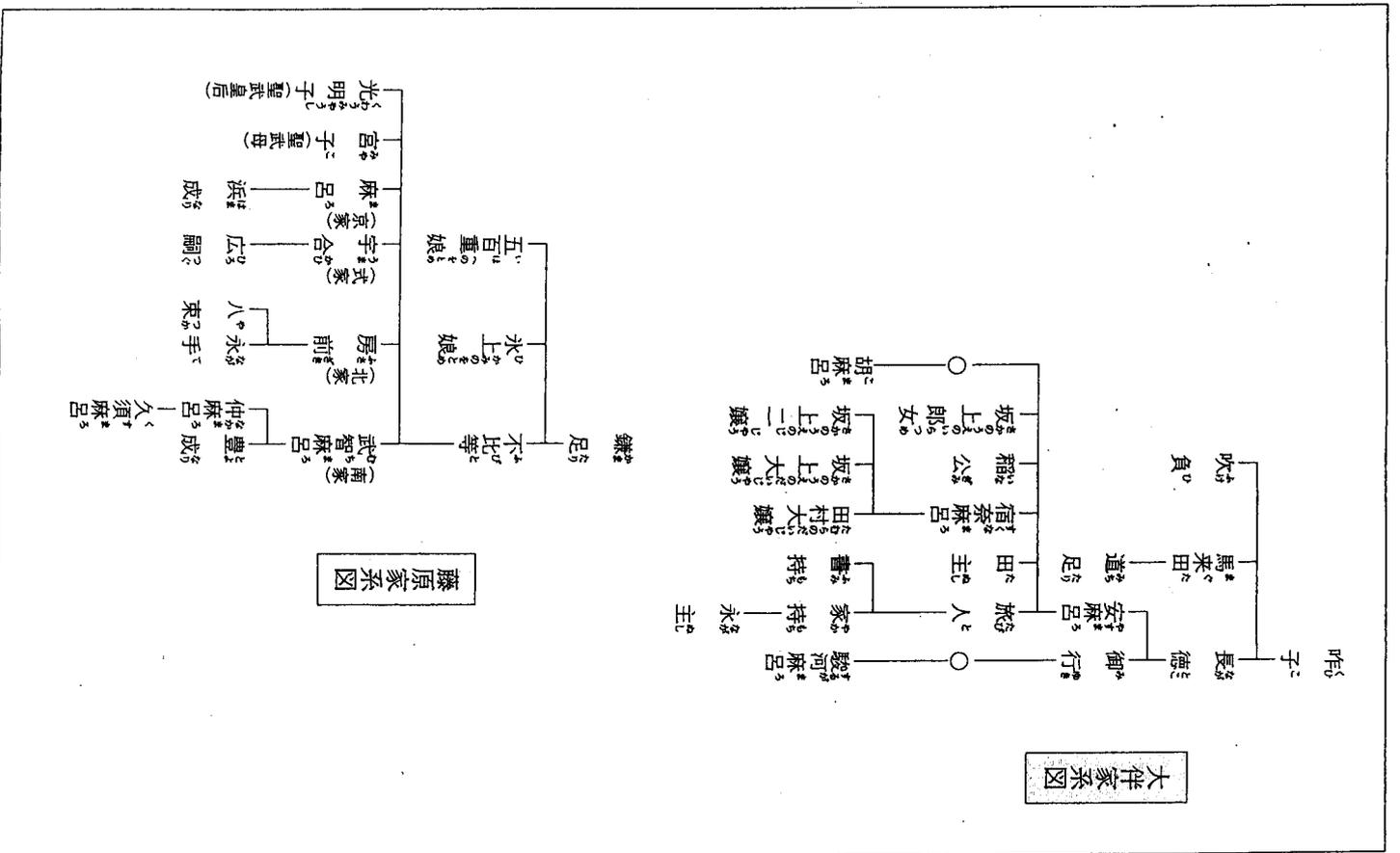
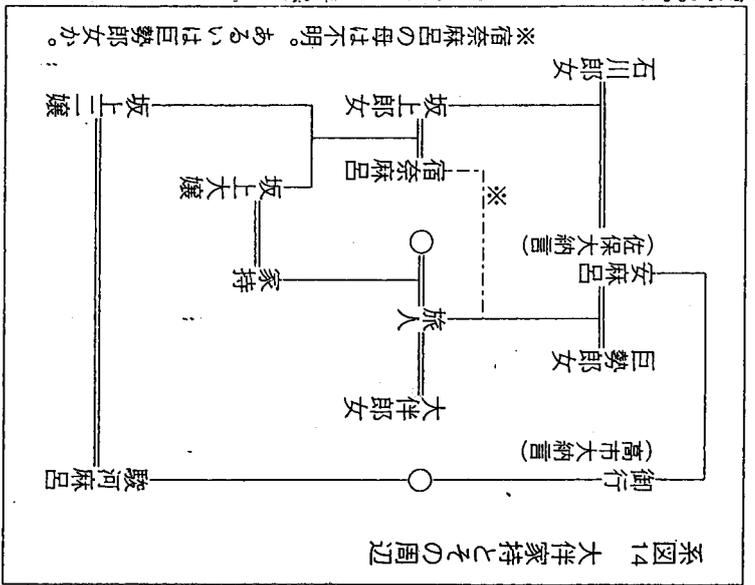
しかし、死後一か月足らずのうちに藤原種継暗殺事件に連座した罪で除名、遺骨は隱岐に流されたが延暦五年復位 （万葉集）中に作品多くその数は、長歌四十六首、短歌四百三十二首、施頭歌一首、量において群を抜いている 内容は多岐にわたり越中において特殊な素材を詠んだ歌、大伴氏の族長としての自覚から生まれた勇壮な長歌、繊細優美な感興を飾り気なく述べた小品など非凡な才能がうかがわれる また、（万葉集）の編纂の中心的存在と見なされ、特に兵部少輔時代に筑紫に下る防人さきもりららを閲し防人歌を撰録した

### 家持の越中時代

天平十八年（746）六月越中守（知事）に任ぜられ七月赴任 二十九歳

国守として国府で、季節の節目、都からの使者の到来の折、部下が一時的に都に登る折などに「やまと歌」の宴をしばしば催した また国内を巡視する中で都とは異なる越中国の風土を生き生きと捉えた歌を残し、そのうち（万葉集）には二百三十六首が収められており採用歌の約五割を占める 天平勝宝三年（751）小納言に任ぜられ八月帰任

三十代前半の五年間を越中で過ごすことでの歌の世界は大きく広がった



## 棟方志功

棟方は洋画家をめざして郷里青森から上京し、帝展に出品するが落選が続いた昭和3年に油絵『雑園』（30号）を出品し帝展に（上京して4年・五回目で）初入選するが、油絵に疑問を持ち版画に転向した

棟方作品の分類（本人の言葉から）

『<sup>はんが</sup>板画』棟方の版画は板画と書いて「はんが」と呼ぶ

『<sup>やまとが</sup>倭画』棟方の墨描きの着彩画は「やまとが」と呼ぶ

『<sup>あぶらが</sup>油画』棟方は油絵を「あぶらが」と呼ぶ

### 棟方志功略年譜

明治36年（1903） 9月5日 青森県青森市に生まれる  
父幸吉、母さだの15人兄弟の第6子、三男  
大正10年（1921）18歳 雑誌『白樺』掲載のゴッホの〈ひまわり〉を見て  
「わだばゴッホになる」と画家になる決心をする  
大正13年（1924）21歳 上京 本郷弓町に下宿  
大正15年（1926）23歳 川上澄生の版画〈初夏の風〉をみて心を打たれる  
昭和2年（1927）24歳 古川龍生の作品を見て「版画の芸術性」を知る  
昭和5年（1930）27歳 赤城チヤと結婚

昭和20年（1945）42歳 富山県西砺波郡福光町に戦争疎開  
福光時代

志功が昭和20年4月に戦争疎開で富山県西砺波郡福光町（現・南砺市福光）に住まい戦後の昭和26年11月に福光を去るまでの6年8ヵ月をいう

昭和26年（1951）48歳 福光町より東京・荻窪に転居

昭和31年（1956）53歳 第28回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展で  
〈二菩薩釈迦十大弟子〉が国際版画大賞を受賞

昭和35年（1960）57歳 眼病がすすみ左目を失明

昭和45年（1970）67歳 文化勲章を授与

昭和50年（1975）72歳 9月13日 逝去 青森市三内霊園に眠る

# 見る者に迫る言葉と絵

「ことばの作家  
棟方志功」展

板画家、棟方志功が1945年から疎開した富山県南砺市の南砺市立福光美術館で、「ことばの作家」展が9月26日まで開かれてい



川崎一平の「瞞着板画巻」の一点(写真上)と1950年の和紙に墨の作品(南砺市立福光美術館蔵)

もあつたことを、約170点の作品を通して示す意欲的、画期的な展覧会である。

36年、33歳の棟方は、「古事記」に取材した佐藤一英の詩「大和し美し」に感動。絵に加えてその詩文をも板木に刻みつけた。20点の作品はまさに劇画のように、言葉と絵

が一体になつて見る者に迫る。国画会展に出品され、柳宗悦、浜田庄司、河井

寛次郎の知遇を得るきっかけとなつた記念的作品である。

謡曲「善知鳥」による「善知鳥版画巻」は、幽玄な能の美を、白と黒だけの世界に凝縮した傑作である。第2回新文展で版画としては初の特選をとつた。「瞞着川板画巻」は、疎開先の福光の町を流れる豆黒川(通称・瞞着川)にまつわる河童伝説がモチーフ。

棟方は自ら説話にまとめ、絵と文による39点の板画巻を作った。ここに掲げた着彩の方は75年、

カレンダー用に裏彩色したものの。このころ棟方は版画を新たに彫る力がなく、旧作から13点を選び色を加えたのだという。事実上の絶筆である。

もう一つの見ものは、棟方が装丁した本を収集する山本正敏氏の多くのコレクションが並んでいること。佐藤春夫、谷崎潤一郎、宮沢賢治、吉井勇らの著書が並び、文学館のようだ。山本氏作成の「棟方志功装画本書目」(暫定版)には408点が記録されている。小学

校卒の棟方は様々な人と精魂傾けて対峙し何かを吸収して後の大を成した。棟方にとって社会が大学だった。

「人間にとって、観ることと聴くことがいかに大切です。(中略)観ることはアンテナで、屋根にあるものでなく、人間の素質のいちばん大事なもので、頭脳こそアンテナ。聴くことはアースで、土に埋めた針金でなく、努力こそアースです」といふ記念切手の原画に添えられた棟方の言葉が好きである。(編集委員 竹田博志)

平成23年度 第6回 ラーニング コモンズ・イベント

# 米と日本人

講師:

大妻女子大学家政学部食物学科公衆衛生研究室

井上榮教授



日時: 2011年11月30日(水) 16:30~17:30

場所: 千代田キャンパス 図書館 4階 ラーニング コモンズ

対象: 本学学生・卒業生・教職員・千代田区在住の方

内容:

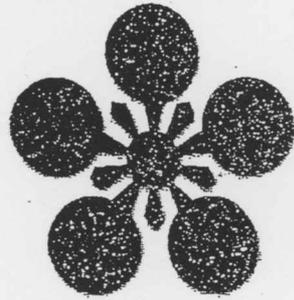
1. 風土と Food
2. 農業が作った古代文明
3. 稲と杉の日本文明
4. 世界一長寿になった日本人
5. 和食の特徴
6. 稲作日本人の「精神」



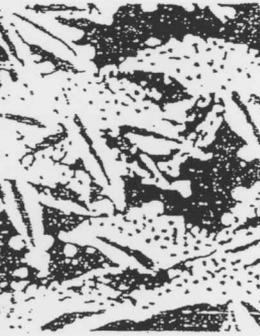
入場無料

千代田区在住の方は事前に電話で参加登録をお願いいたします。

お問い合わせ先: 03(5275)6013



# 前田家と高岡



二十回

国宝瑞龍寺と前田利長墓所

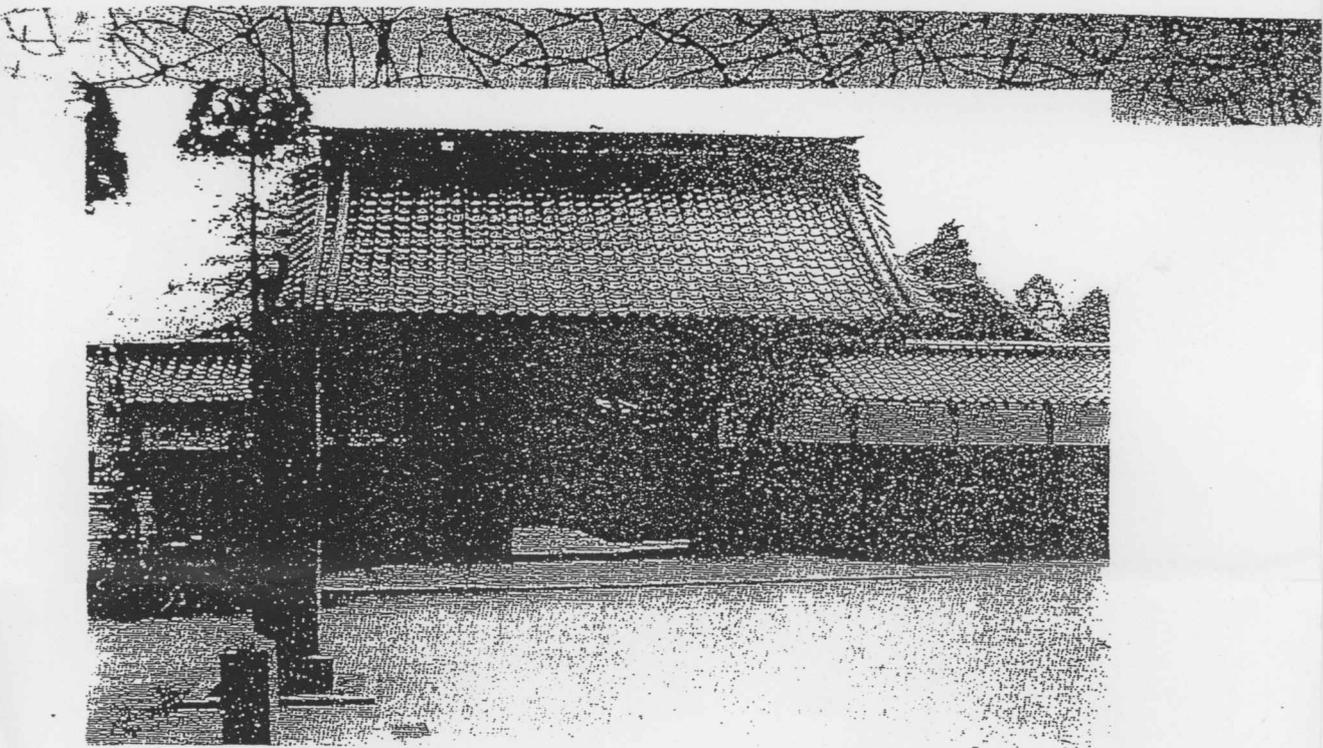
八丁道(その二)

御廟守の寺 繁久寺

前田利長マキタ リチカ廟ウラと向いあつて建つて居るお寺が曹洞宗仙寿山繁久寺ソウトウシュウサンハンクウジである。このお寺は三代藩主前田利常の命により、正保三年(一六四六)利長の三十三回忌に合わせて造営されたといわれている。

そもそも繁久寺は戦国時代の永禄五年(一五六二)、射水郡南条の城主であつた加納中務が氷見飯久保の地に一禅刹ぜんせきを創建する。開山には、立山地獄谷の餓鬼济度伝説で著名な光巖寺七代確翁契幡たけおんけいばんが勧請せられ寺名を飯久寺と号する。今日の繁久寺のはじまりである。飯久寺はその後、守山の海老坂の地に移り、飯久保の跡地へは、氷見吉池にあつた光久寺が移つたといわれている。

繁久寺は利長の廟守の寺として知られているが、前田家との因縁は四代骨洲翁徹ほしゅうおんてつの代にはじまる。利長廟の造営に当たつては、守山飯久寺の翁徹は廟守に選ばれていたが、次のような寺伝がある。



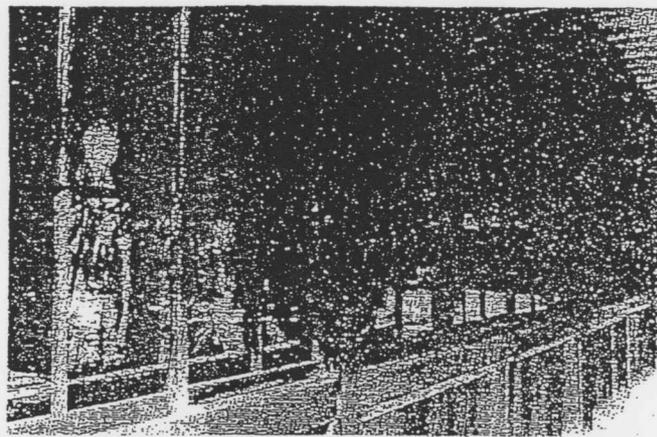
曹洞宗 繁久寺の正面 清閑で床しい趣がある

廟の工事中、利常は何度も現地視察におもむき、その都度近郷の有志らは十下座して送迎したが守山飯久寺の住職翁徹は一度も出ようとしなかった。人々が翁徹を避難すると、

「禪門に「来る者は拒まず、去る者は追わず」の一語あり。用あらばきたれ。わしは、用なきゆえに会わざるのみ」と、答えたという。これを聞いた利常

はその気骨に深く感じ、強いて翁徹を請い廟守とし、家臣伊藤内膳を奉行として、聚楽第の解体材を引かせ廟守供養の寺を造らせたと伝えられている。以後、飯久寺は現在地に移り、繁久寺と改まる。

繁久寺の建物については聚楽第のほか小松の霞鶴亭を移築したなど諸説が伝えられているが安政六年（一八五九）全焼したので尚はつきりしないが、文久二年（一八六二）規模や構造はそのまま模して建立されたと伝えられている。



山門両側の回廊に大小さまざま 表情の異なる五百羅漢が並ぶ

廟所並びに繁久寺完成後は、火ともし掃除人をおき、日夕仏前、墓前の勤行を怠らず、境内には塵一つ残されていなかったといわれている。